

アビエイター

2005(平成17)年3月29日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督＝マーティン・スコセッシ／出演＝レオナルド・ディカプリオ／ケイト・ブランシェット／ケイト・ベッキンセール／ジュード・ロウ／アレック・ボールドウィン／グウェン・ステファニー／アラン・アルダ／イアン・ホルム／ジョン・C・ライリー（松竹配給／2004年アメリカ映画／169分）

……アカデミー賞最多11部門にノミネートされながら、主演男（女）優賞、作品賞、監督賞などの主要4部門をクリント・イーストウッド監督の『ミリオンダラー・ベイビー』と『Ray／レイ』に奪われ、涙をのんだのがこの映画。150億円をかけた超大作だが、同じ金をかけるのなら私には歴史超大作の方が……。またこの映画に執念を燃やしたディカプリオはたしかにすごい熱演だが、私にはどうもじっくりこない……。最優秀助演女優賞を獲得したケイト・ブランシェットの名演技も十分わかるが、失礼ながらホンモノのキャサリン・ヘップバーンはもっと美人なのでは……。それやこれやで、スコセッシ監督とディカプリオの惨敗はやはり当然……？

ハワード・ヒューズとは？

ハワード・ヒューズは、1930～50年頃に大活躍した伝説的な人物だが、彼には映画監督としての顔と飛行家（航空会社オーナー）としての顔の2つがあった。そしてこの人物の最大の特徴は、その両者に徹底した完璧主義を貫いたということ。映画の世界では、ちょうど無声映画からトーキーに変わっていく時代の中、『地獄の天使』（30年）という「どエライ」作品をつくってきた。他方飛行機の世界では、第2次世界大戦をはさんで「ハーキュリーズ」というどデカイ輸送機をつくったり、国際線就航の権利をめぐるパンナム（パン・アメリカン航空）と一大バトル（？）を展開したりと、そりゃすごいもの。もちろん私も、アメリカにそんな人物が存在したことなどこの映画を観るまでは全然知らなかったから、

この映画から学ぶことはいっぱい！

もっとも、こんな完璧主義の人間には必ず脆いところがあるもの。ハワード・ヒューズの場合、その1つは女性問題。まあこれはあまりにも当然のこと……？ そしてもう1つは、映画の中でも頻繁に示される、神経病に近いような潔癖症……？ これは彼の人生の後半を強迫神経症として大いに悩ませることに……。

明暗を分けたアカデミー賞！

この映画は、第77回アカデミー賞で最多11部門にノミネートされながら、主演男(女)優賞、作品賞、監督賞の「主要4部門」を、クリント・イーストウッドの『ミリオンダラー・ベイビー』(04年)と『Ray／レイ』(04年)に奪われて惨敗した。この結果にはスコセッシ監督も残念だっただろうが、ディカプリオの落胆ぶりは大きかったらしい。『タイタニック』(97年)、『ギャング・オブ・ニューヨーク』(02年)に続いて最優秀主演男優賞を逃したディカプリオのショックぶりは、アカデミー賞授賞式のテレビ放送によって全世界に実況中継された。それでも、最優秀撮影賞、編集賞、美術賞、衣装デザイン賞という4部門の他、ケイト・ブランシェットが最優秀助演女優賞を受賞することができたのは、不幸中の幸い……？

スコセッシ監督はなぜディカプリオに固執？

私はマーティン・スコセッシ監督の昔の作品は観ていないが、『タクシー・ドライバー』(76年)、『レイジング・ブル』(80年)、『ケープ・フィアー』(91年)などマーティン・スコセッシ監督の名作には、ロバート・デ・ニーロとの組み合わせが多いとのこと。しかし私が知っているスコセッシ監督の『ギャング・オブ・ニューヨーク』では、ディカプリオと組んでいる。言うまでもなくディカプリオはジェームズ・キャメロン監督の『タイタニック』で大ブレイクした俳優で、その後も『仮面の男』(98年)、『セレブリティ』(98年)、『ザ・ビーチ』(00年)への主演を続けているが、その出来はもう1つ……？ 私は『ギャング・オブ・ニューヨーク』という映画は大好きだし高く評価しているが、この映画でも実はディカプリオよりもギャング団のボス、ビル・ザ・ブッチャーに扮したダニエル・デイ＝ルイスの方が目立っていた。こんな珍現象は、最近観た『コラテラ

ル』(04年)でもトム・クルーズよりタクシー運転手に扮したジェイミー・フォックスの方が目立っていたのと同じ。こうなりゃ、主役も形無し……？

これは決して演技の上手い下手という問題ではなく、その映画のテーマ設定やストーリー展開そして他の登場人物との兼ね合いによるもの。ディカプリオはひょっとして『タイタニック』や『ロミオ&ジュリエット』(96年)のような美男美女2人が登場するストーリーには向いていても、多様な登場人物との競い合いの中で1人輝くという主人公にはひょっとして向かないのかも……？ たとえば、ディカプリオがコリン・ファレルにかわって『アレキサンダー』(04年)の主役をやったらどうなるのだろうか……？

日本人にはなじみのうすいハワード・ヒューズ

パンフレットによれば、この『アビエイター』という映画が生まれた最大の要因は、「10代の頃にハワード・ヒューズの伝記を読んで以来、彼の人生を映画にしたいと願いつけてきたレオナルド・ディカプリオの情熱だった」とのこと。たしかに1930~40年代のハリウッドや航空機業界において、このハワード・ヒューズは伝説的な人物だったらしいが、いかんせん日本人にはなじみのうすい人物。したがって、この映画は3時間弱という上映時間の中で、一定の時期における一定のエピソードを中心として、彼の人生を面白く描いていることはたしかだが、それを十分理解するのは結構困難かも……？

ケイト・ブランシェットはたしかに名演技だが……

ケイト・ブランシェットは、『エリザベス』(98年)を観てもわかるとおりの演技派女優。『ヴェロニカ・ゲリン』(03年)での熱演を観ても、演技派女優としての魅力はいっぱいだが、「玉にキズ」は美人とはいえないこと……？

そのケイト・ブランシェットが、この『アビエイター』では何とあの伝説的な大女優キャサリン・ヘップバーンに扮し、ディカプリオ扮するハワード・ヒューズとの大恋愛を演じている。映画王と飛行機王の両者を目指す若きハワード・ヒューズと世紀の大女優キャサリン・ヘップバーンとの大恋愛は、もちろんホントにあったお話。しかしそんな組み合わせがうまく長続きするはずがないのは当然。

2人の恋愛の「上り坂」と「下り坂」の描き方は、この映画の1つの大きなポイント。またいくら演技派のケイト・ブランシェットとしても、キャサリン・ヘップバーンを演じることは難しいはず。それはパンフレットにも「正直言ってマーティン・スコセッシが監督でなかったら、こんなことやってみようとは思わなかった」と書かれていることからよくわかる。しかしさすが演技派女優。ホンモノのキャサリン・ヘップバーンがこんな風だったのかどうかは知るよしもないが、プライベートな生活ではこんな女だった、ということが実によくわかるようにイキイキと演じている。これでは最優秀助演女優賞の受賞も当然か……。もっとも私の好みだけでいけば、『クローサー』（04年）でストリッパー役を演じた若い美人女優ナタリー・ポートマンでもよかったのではと思っているが……。

第2、第3の女性遍歴は中途半端……？

この映画におけるハワード・ヒューズのメインの恋愛模様は、最初のキャサリン・ヘップバーンとの世紀の大恋愛。それはともかく、お互いのスレ違いが目立ちはじめ、キャサリン・ヘップバーンの方から別れようと言いついた時のハワード・ヒューズの言葉はそりゃスゴイ。これはお見逃ししないように。イザとなれば俺も言ってみたいもの……？

そしてキャサリンと別れた後、ハワードはまず15歳の新人女優フェイス・ドマーグ（ケリー・ガーナー）を恋の相手としたが、その選択の仕方はどうも……？ こんな権力を笠に着たような恋人の選び方についてあなたはと思う……？ もっともハワードにしてみれば、フェイスはちょっとしたショートリリーフ（？）だったようで、キャサリン・ヘップバーンに続く「本命彼女」の第2はエヴァ・ガードナー（ケイト・ベッキンセル）。そりゃそうだろう。いくら何でも15歳の若い子1人だけをずっと……とはいかないはず。

しかしこのエヴァ・ガードナーと恋愛している時期のハワードは、飛行機事故で瀕死の重傷を負ったり、FBIからの強制捜査を受けたりと苦難の連続。したがって美人女優のエヴァ・ガードナーに対しても、盗聴器を仕掛けるなどちょっとイヤらしいオッサンの雰囲気も……。多分これも晩年彼を悩ませる強迫神経症の1つの現れなのだろうが……。

なおハワードの名誉のために付け加えておけば、彼は最初の恋人キャサリン・ヘップバーンが次の男との密会写真を世間にバラまかれそうになると、それを防ぐためキャサリンには何も言わないままその写真を買取するというホワイト・ナイト（白馬の騎士）の面も見せていたカッコいい男……。もっともこれも、金が腐るほどありあまっているからできることかもしれないが……？

ロッキード事件とは？

2005年3月25日名古屋で愛知万博（愛・地球博）が開催された。これは自然の叡智をテーマとしたもので、人類の進歩と調和をテーマとして1970年に開催された大阪万博とはその価値観を180度転換したものだ。そしてまたこの大阪万博は、日本の高度経済成長政策真っ盛りの時代におけるもの。それを自民党という政治権力の中核・指令塔として推進したのが、当時「今太閤」ともてはやされ、「日本列島改造論」で有名な田中角栄氏。言うまでもなく、新潟5区選出の田中真紀子現衆議院議員はその娘だ。

そして1970年代、日本を震撼させた超特大事件がロッキード事件。これは日本の航空会社である全日空への旅客機の売り込みをめぐる贈収賄事件。すなわち本来ダグラス社のDC-10機とされていたものが、アメリカのロッキード社による田中角栄総理をはじめとする有力者、権力者への賄賂によって、急遽ロッキード社のトライスター機に変わったのではないかという問題をめぐって展開された一大疑獄事件だ。このロッキード事件の第1審判決は、1983年10月12日東京地裁で下された懲役4年という実刑判決。これによって日本ははじめて「総理の犯罪」という歴史的な体験をすることになったが、1987年の控訴審（東京高裁）での控訴棄却判決を経て、上告審係属中の1993年12月16日に田中角栄氏が死亡したため、「公訴棄却」によって事件が終了し、いかにも中途半端な結果となってしまったのは実に残念！

既得権益・抵抗勢力の代表はパンナム！

アメリカの航空会社として有名なものはパンナム（パン・アメリカン航空）の他、ダグラス社やボーイング社そしてロッキード社など。しかし、ハワード・ヒ

ューズが航空会社 TWA (Trans World Airways) 社を買収し、これをパンナムの対抗軸にまで育てようとしていた1930~40年代においては、アメリカとヨーロッパ大陸を結ぶ国際線を扱うのはパンナム 1 社だけという状況だったらしい。すなわちダグラス社は1967年に誕生 (1997年にボーイング社に吸収) したものだし、ロッキード社は1920年代に登場したものの、1932年に1度倒産して買収され、民間輸送機の製作に着手したのは1970年代とのこと。ロッキード社はこのような後発の会社であったため、前述のロッキード事件を起こすことになったわけだ。映画ではこのパンナムの代表者がホアン・トリップ社長 (アレック・ボールドウィン)。いかにも自信タップリでいつも冷静沈着ないい男だが、ちょっと鼻持ちならない雰囲気も……。もっとも、これだけの規模の会社のワンマン (?) 社長ともなれば、当然こんな雰囲気であればつとまらない……?

ハワードが、こんな「雲の上の存在」であったパンナム社と本気になって国際線の就航ルートを争おうと考えたのは、ハワードと TWA 社長との会食の席に、トリップ社長がわざわざ表敬訪問をして無用な刺激 (?) をしたため……。「ヤブ蛇」とは、まさにこのトリップ社長の行動を指すものだろう……?

ハワードの TWA 社からみれば、こんなパンナムこそ既得権益・抵抗勢力の代表と位置づけられるものだった。巨大な利益をあげうる航空会社は、自動車会社や石油会社等と並んで巨大な利権をもっているのは当然。こんなパンナム社のトリップ社長と政界との結びつきは……?

アメリカ上院議員のお仕事は?

世界一の民主主義国 (?) アメリカは、民主主義の先輩 (?) であるイギリスの議院内閣制とは異なり、大統領制を採用している。アメリカの議会には上院と下院があるが、行政府である大統領と立法府である上・下院とのバランス (力関係) は微妙。そしてこれは、日本における知事や市長と議会との関係と同じようなもの……? アメリカでも議員の仕事は法律をつくることだが、日本では長い間政権与党であった自民党の中に、郵政族、運輸族、建設族 etc. の族議員がいるのと同じように、アメリカにも業界の利益代表として議員活動を展開している人がたくさんいる。そして、アメリカ最大の航空会社であったパンナムともなれば、

アメリカ空軍のエライさんたちとのつながりは当然として、上院・下院の議員とも密接なつながりがあるのも当然。そしてその代表が、この映画に登場するオーウェン・ブリュースター上院議員（アラン・アルダ）だ。トリップ社長の依頼を受けたオーウェン上院議員が準備した「エアライン・コミュニティ法案」は、安全性や経済性などいろいろな理屈をつけてはいるものの、事実上パンナムに国際線の就航を独占させることを認めるための法案であり、その実質的な目的は競争相手として進出しようとしている TWA 社を排除すること。露骨に目的を示した法案はアメリカではある意味当たり前。オーウェン上院議員がこの法案を通すことの「見返り」としてトリップ社長に要求したものは……？

公聴会のシーンはこの映画のハイライト！

完成させた新型飛行機に初試乗して瀕死の重傷を負ったハワードを襲った危機は、第1に巨大輸送機「ハーキュリーズ」契約破棄の通告であり、第2に空軍から受領した軍用機開発資金の不正流用容疑による FBI からの強制捜査だった。ハワードとオーウェン上院議員の2人だけの会食の場で、オーウェン上院議員はハワードが TWA 社の株をすべてパンナムに売却して、国際線の就航争いから手を引き、「エアライン・コミュニティ法案」成立に協力すれば、オーウェン上院議員が主宰する公聴会でのハワードの容疑の公表を差し控えてもいいと提案した。しかし熱血漢(?)のハワードはこれを拒否。事故で傷ついた足をひきずりながら、また難聴になっている身体に鞭打ちながら、敢然と公聴会におけるオーウェン上院議員との闘いに挑んでいった。

この公聴会でのやりとりはこの映画の1つのハイライト！ 小泉総理大臣登場後の最近の国会の党首討論は結構面白いが、大体日本では、国会での議論はもちろん、参考人を招致してのやりとりをみても、迫力がなく面白くないものが多い。かつての「総理！ 総理！」を連発した辻元清美議員や速射砲のようなしゃべりで一世を風靡した鈴木宗男議員のような面白い(?)議員の姿が見られなくなったのは寂しい限り。映画の上とはいいながら、オーウェン上院議員主宰の公聴会の席上で、攻められているはずのハワードが、逆にさまざまなネタを提示して逆襲していくシーンは実にお見事。さすがディバートの国、スピーチの国と感心！

製作費は150億円！

この『アビエイター』の製作費は150億円とのこと。『アレキサンダー』（04年）の200億円まではいかないものの、日本映画の大作といわれる『北の零年』（05年）や『ローレライ』（05年）が10～15億円だから、それと比べると約10倍！やはり規模のデカさは日本映画とハリウッド映画は全然違うことを実感！しかし『アレキサンダー』などの歴史大作と比較すると、この『アビエイター』の製作になぜ150億円もかかるのか私にはよくわからない。飛行機のシーンは基本的には現実の飛行機を使えばいいわけだから、お金がかかるのは豪華クラブの「ココナッツ・グローヴ」のセットやディカプリオの飛行機が墜落するシーンそして俳優たちの豪華な衣装くらいではないかと思うのだが……？そしてまた同じお金を使うのなら、やはりこういう現代劇よりも歴史大作に使った方が使い甲斐があると私は思うのだが……。

今後のスコセッシ監督作品は？

パンフレットによれば、スコセッシ監督は現在『インファナル・アフェア』（02年）のリメイク版である『The Departed』をディカプリオ主演で準備中とのこと。本場香港の『インファナル・アフェア』は、トニー・レオンとアンディ・ラウというちょうど拮抗した2大俳優の対決の面白さで成り立っていたが、そのハリウッド版ではディカプリオ VS マット・デイモンとのこと。果たしてこの両雄がバランスよく並び立つだろうか。

また、もう1つ準備中なのが、何と黒澤明監督の『酔いどれ天使』（48年）のリメイク版とのこと。これは全くの未知数だが、下手すると『ザ・ビーチ』と同じような「大失敗」になってしまう危険も……？

安くておいしいため私がいつも行っている、事務所のすぐ近くにある「焼肉屋」のマスターは、大のスコセッシ監督ファン。彼の映画の趣味は私と大きく異なるが、映画談義になると話は尽きなくなってしまう仲だが、そんな彼はスコセッシ監督の今のこんな姿勢をどう思っているのだろうか。1度じっくりと議論してみたいものだ。

2005(平成17)年3月31日記